Monthly Contents（月刊誌の主な特集記事）

ザ・クインテッセンス／2012．1月号

○補綴装置と歯周組織の接点（前編）-Tissue Stability を獲得できるカントゥアを検証する
（木林博之）

＊審美歯科修復処置において、補綴装置と歯周組織の調和のためには、長期にわたって炎症がなく形態的変化がないことが重要であるが、筆者は補綴装置に具備されるべき歯肉縁下カントゥアについて文献と臨床症例からわかりやすく詳細に考察している。特に歯肉縁下のカントゥアの形態は、辺縁歯肉の位置・形態・炎症の発生に影響するため、その評価基準についての解説は、日常臨床に役立つであろう。

○明度コントロールから理解する前歯部コンポジットレジン修復
第１回　なぜ、明度が重要なのか？　（青島徹児）

＊筆者によると、CR 充填において、術後に充填部のみが暗く見えることは、色彩学における色の三属性の「色相、明度、彩度」の中の「明度」が大きな影響を及ぼしているという。前歯部において天然歯質の十分な裏打ちのない 3,4 級窩洞が明度コントロールに不利であり、CR 修復を行う際は、歯の内部の解剖学的構造を理解して、適した CR を選択することが重要となる。隔月連載であるが、その明度コントロールの実際は知っておくべき内容であろう。

日本歯科評論／2012．1月号

○<特集>若き歯科医師たちへのメッセージ１
―患者さんから信頼されるために必要な基本治療のポイント―（大村祐進　白石和仁　他）

＊昨年岡山県歯科医師会で講演してくださった大村祐進先生が企画された特集です。いろいろな情報がある中、やはり基本がしっかりしていないと意味がありません。本号では歯内療法、支台歯築造の基本を述べています。メタルコアの除去の仕方など、みんなどうしているのだろうという内容もあり、すぐに臨床に使えるものばかりで是非一読をお勧めします。

○その診断は正しいか――若手臨床家の取り組みから　（小林友貴　李　昌弘　他）

＊先月号からの第２弾です。今号は小林先生のインプラントを中心にした症例についてディスカッションを行い、申　基喆先生がコメントを寄せています。診断の重要さを改めて感じる内容になっています。

デンタルダイヤモンド／2012．1月号

○インプラント時代の天然歯保存の意義（下地勲、弘岡秀明）

＊近年のインプラント治療の普及率はめざましく、歯科雑誌および講習会のテーマもインプラントがメインとなっているのが、現状である。しかし、このようなインプラント普及の影には、残すことのできる歯が安易に抜歯されているのではないかといった懸念を払拭しきれないことも事実である。筆者らは天然歯の保存に最大限努力するという観点から、矯正、再植、再生療法を駆使し、保存に努める必要があると強調している。また、インプラントは将来、おそらく歯の再生にとって代わられ、現在のインプラント治療の結果を冷静かつ長期的なスパンで振り返ることになるだろうという筆者の言葉が印象的である。

○自家骨移植に代わり得る新しい歯槽骨再生治療法「TE-BONE ™」（縣秀樹　他）

＊インプラント治療に必要な骨再生法には、一長一短あり骨再生効果、安全性、侵襲の度合いのすべての点で満足できる治療法の開発が待ち望まれている。自家の骨形成性細胞と人工骨を組み合わせる新しい歯槽骨再生法は自家骨移植よりはるかに低侵襲で、骨再生効果も高いと考えられるが、細胞の採取、培養、移植には中核病院との連携が必要となる。そこで現在、医療システム「TE-BONE ™」を開発中であり、本稿で紹介している。

歯界展望／2012．1月号

○インプラント療法の原点を訪ねて１インプラント療法の現状と問題点（小宮山彌太郎）

＊日のクローズアップ現代で、歯科医療は医療になっていないとまで言われた事は、記憶に新しいと思う。それはインプラント治療の被害者が現実として多く存在し、これをマスメディアがこぞって取り上げ、NHK でさえあのような報道をしたことから、今後ますます大きな社会問題になるかもしれない。
この番組にも出演していた小宮山先生は、ブローネンマルク先生とインプラント治療の被害者を減らすために、どうすれば成功するかについてはすでに語りつくした。今後は、問題点や失敗について話し合おうと語りあったそうだ。
「悪貨が良貨を駆逐する」がごとく、インプラント治療が良質な歯科医療を貶しめることにならないように、今原点に立ち返って考える必要があると思われる。